教育医学(名古屋) 平成20年12月31日発行 ISSN 0917－5539

THE JOURNAL OF THE MEDICAL EDUCATION(NAGOYA)

教育医学（名古屋）

Vol.48 DEC.2008

目　次

特　集

「学校保健活動実践報告（平成19年度優良校の実践から）」

○ 心とからだの健やかな成長をめざして
—自他のからだ・心・いのちを大切にする子どもの育成— 東　桜小学校…… 2
○ 地域に学ぶ健康教育
—喫煙・性・薬物に対する指導を通して— 左京山中学校…… 6
○ 自己の能力を最大限に発揮できる児童の育成
—歯の磨き方や歯並びを基に自分の課題を考える
ことができ，生活の中で実践できる児童— 東　丘小学校……10
○ 自主的に健康な生活を実践できる生徒の育成
—日常的な歯科の保健指導を通して— 津賀田中学校……14

Ⅰ　保健指導
伊藤恭子：「食」という視点を大切にした健康教育の在り方 ……19
木全友美：「心を繋ぐ」保健室を目指して
—Aとのかかわりの記録から—……24
野田久美子：自分の意志で危険を回避する力を身につけさせる指導
—喫煙・飲酒・薬物乱用予防指導をバランスよく取り入れる工夫 — ……29
鈴木俊夫，高木洋子，山本恵里
：特別支援学校における歯みがきの実践
—発達段階に合わせた指導—……35
冨板みつ子，酒徳恵理子
：保健室企画「サンタのおくりもの」の実践報告 ……39

Ⅱ　保健教育
森　孝生：麻疹(はしか)は根絶できるのか？ ……45
(最近の麻疹対策)
戸塚伸吉，山林茂樹，元倉智博，西垣士朗，高柳泰世
：小・中学生の目の健康 ……50
内藤雅夫：知っていてほしい耳の病気 ……57
高村秀平：誕生10周年の「名古屋市学校歯科121運動」……59
寺島健二：循環ろ過器の処理水水質の向上を目指して ……66

Ⅲ　学校保健業績集

名古屋市学校保健会
名古屋市教育委員会

特別支援学校における歯みがきの実践

― 発達段階に合わせた指導 ―

名古屋市立守山養護学校　学校歯科医　鈴　木　俊　夫
養護教諭　高　木　洋　子
養護教諭　山　本　恵　里

1　はじめに

本校は，知的障害のある児童生徒が通う特別支援学校である。小学部，中学部，高等部が設置され，179人の児童生徒が在籍し，同じ敷地内で学んでいる。近年，名古屋市全体の特別支援学校の児童生徒数が増え，本校も児童生徒の増加により校舎の増築がされ，今年度新しい校舎を加え新年度がスタートした。

本校の児童生徒のおよそ半数が自閉症である。その他に染色体異常やてんかんなどの児童生徒も在籍している。児童生徒の障害や疾病は様々で，一人一人，個に応じた対応が必要となっている。

2　児童生徒の実態

(1)　歯科健診の様子

歯科健診は，口を大きく開けたままの姿勢を要求されるため，苦手な児童生徒が多い健診の一つである。そのため，いすに座ってもなかなか口を開けることができない児童生徒や，強く体を動かして，抵抗する児童生徒が見られる。時には，口の中に入れた歯鏡をかみ，抜けなくなってしまうこともある。このような場合には，歯鏡のかわりに歯ブラシを学校歯科医に持ってもらい，検査を行う。給食後の歯みがきを行っている本校では，歯ブラシを見ると比較的恐怖心がなく口を開ける児童生徒が多いため，この方法で歯科健診をスムーズに行うことができる。

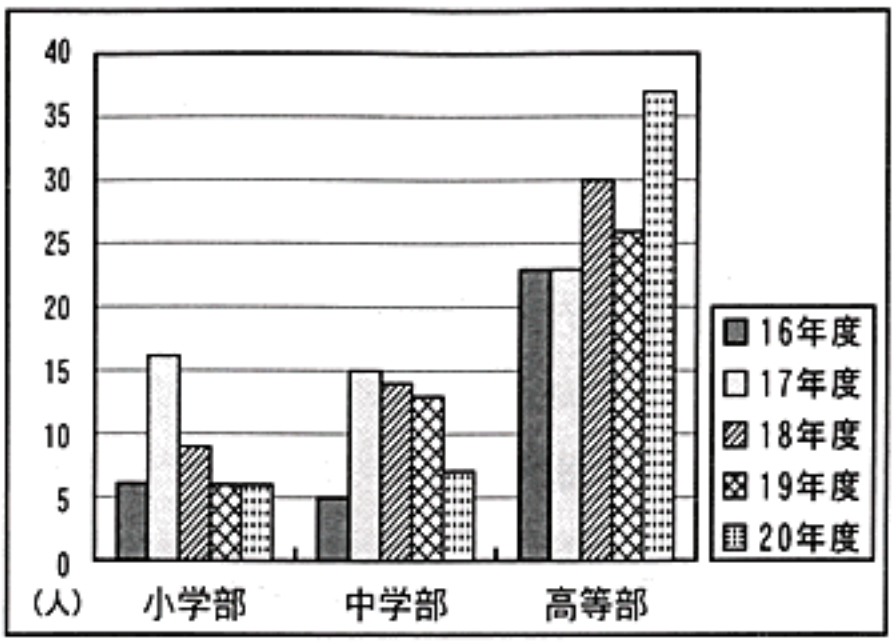
定期健康診断だけでなく，11月に秋期歯科健診を行うことで，むし歯の早期発見や口腔内の経過観察を行うことができている。

(2)　本校の歯科における実態

本校の永久歯のむし歯所有者数は，年ごとに多少上下するものの，過去５年間は，ほぼ横ばいである。表１より，高等部生徒のむし歯所有者数が増えているようにみえるが，これは，高等部の生徒数が年々増加しているからである。

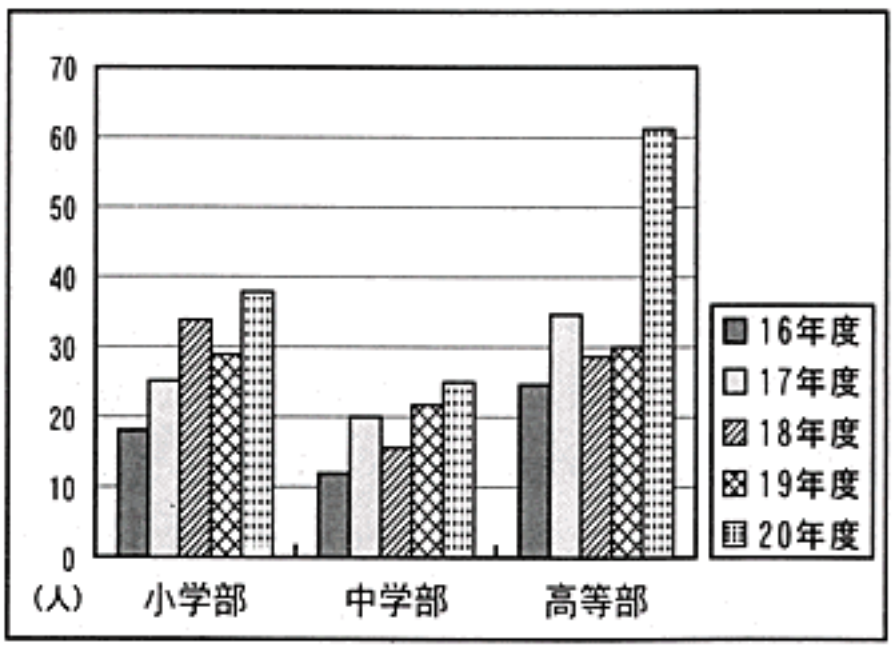
歯科健診の結果をみていると，口腔内がとてもきれいな児童生徒とそうでない児童生徒とに２極化する。その理由として，前者は，歯科の主治医があり，定期的に歯科治療に通うなどしていて，むし歯や歯肉炎を未然に防いでいる。後者は，むし歯や歯肉炎ができても，歯科治療には行かず，そのまま放置してしまうことが多い。

放置してしまう理由として，全身疾患の治療が歯科治療より優先することや，歯科治療が困難な場合が多く，受診を敬遠してしまうことがあげられる。歯科治療が困難な理由としては，治療に対する恐怖心が強く，体動が激しく治療できないため，保護者があきらめてしまうことや，障害のある児童生徒が受診しやすい医療機関が少ないことが考えられる。また，児童生徒の中には，痛みの感じ方が少し違ったり，痛みを痛みとして感じなかったりすることもある。そのため，痛いと訴えることがなく，歯科健診結果を渡しても，まだ大丈夫だと，そのまま放置されてしまうこともあると考えられる。それに加え，保護者の中には「むし歯は，すぐに生命にかかわることではない」と軽視されてしまう傾向があると考えられる。



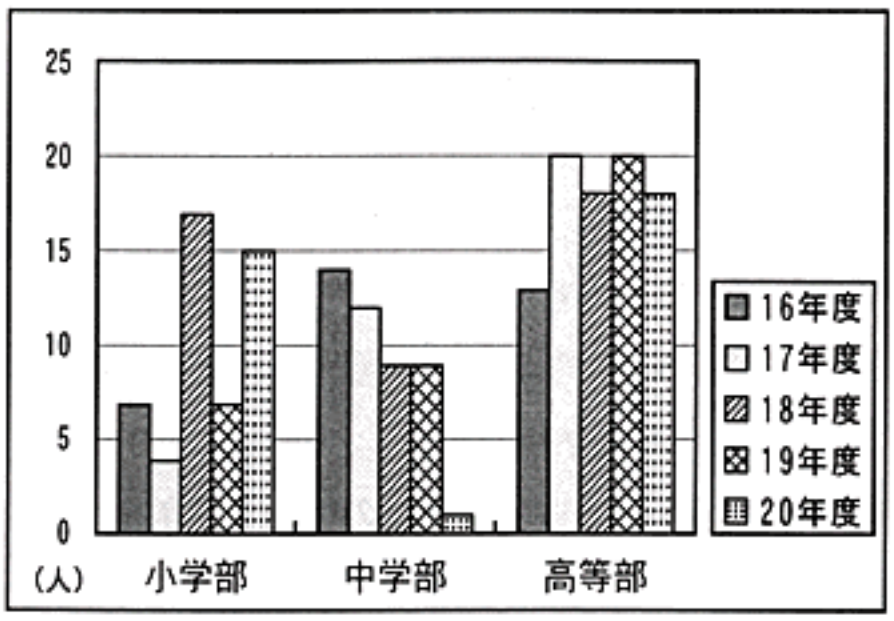
〔表１　過去５年間の永久歯むし歯所有者数〕

過去５年間，むし歯がほぼ横ばいの一方で，気になるのが，歯肉炎（ＧＯ，Ｇ）の増加である。表２からわかるように，小中学部で少しずつ増えてきている。高等部については，在籍生徒数が年々増えているため，平成20年度を除き，それほど変化していない。この結果から，特に気になることは，小学部の比較的年齢の低いうちから歯肉炎（ＧＯ）の人数が多い点である。抗てんかん薬の副作用として，歯肉の増殖や肥大ということも考えられる。しかし，多くの歯肉炎は，歯のみがき方などにより，改善されるものである。このことから口腔衛生の大切さ，指導の大切さがわかる。



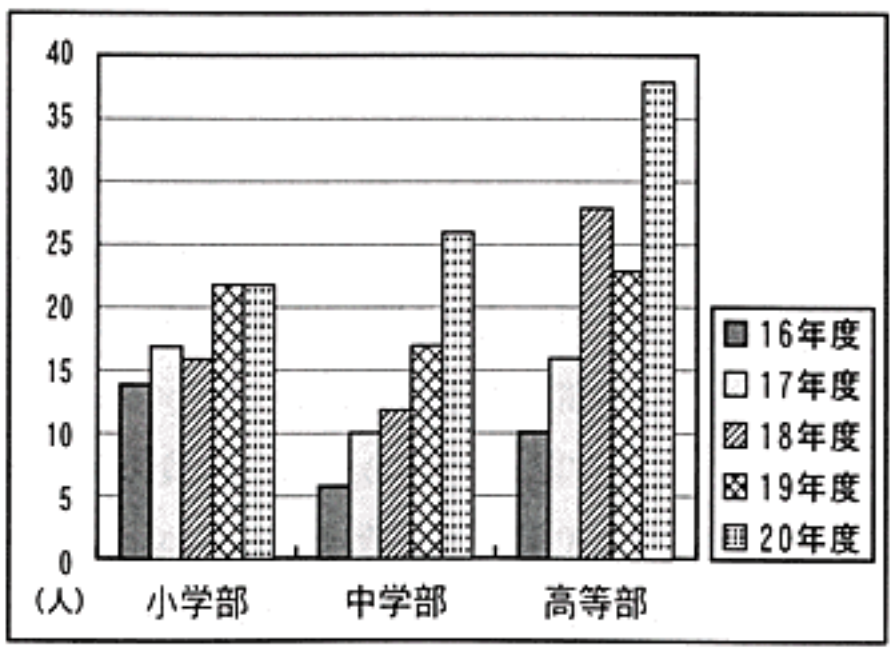
〔表２　過去５年間の歯肉炎（ＧＯ）所有者数〕

さらに，本校の特徴として，歯列・咬合に問題のある児童生徒が多い。障害の一つとして顎の形に特徴があり，歯列・咬合に影響をおよぼすこともある。また，給食の様子を見ていると，よくかまずに飲み込むようにして食べ物を食べる姿がみられる。「食べたい」という意識が先走ってしまい，よくかんで食べるということが難しい。顎の発達に関して，影響してくる場合もあるのではないかと考えている。



〔表３　過去５年間の歯列咬合（要観察）者数〕

さらには，先ほどむし歯のところで記述したように，歯科治療が困難な児童生徒が多いため，歯列・咬合に問題があっても，矯正等をすることなく，そのまま放置されるケースも少なくない。そのため，高等部の歯列・咬合の要観察者，要精検者が多いのではないかと考えられる。



〔表４　過去５年間の歯列咬合（要精検）者数〕

３　各学部の歯みがき指導の実践

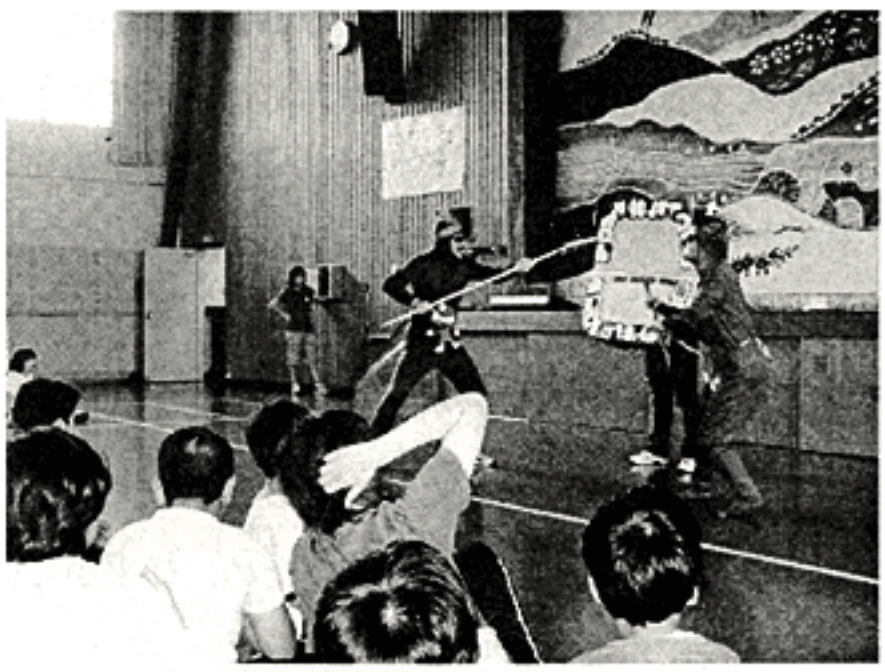
本校では，給食後の歯みがき指導を全校で実施いている。自宅から歯ブラシとコップを持参し，給食が終わった学級・学年から洗面所あるいは教

室で歯みがきを行う。小学部のころには，口を開けることができなかった児童が，毎日繰り返し行うことで，中学部・高等部では，自分で歯みがきを行う姿がみられる。低年齢のうちから，根気強く歯をみがくことに慣れさせ，毎日続けることの大切さを教える必要があると考えている。

児童生徒の実態や発達段階に合わせて，本校で行っている歯みがき指導について紹介する。

(1) 小学部の実践

小学部では，歯ブラシを口の中に入れることから始まる。その後，歯みがきを習慣付けるための指導を行っている。ごはんを食べた後，歯みがきをしないとばい菌がやってきて口の中で悪さをするということを，大きな歯の模型を用いて説明したり，歯みがきにはバイキンをやっつけるすごいパワーがあるのだということを簡単な劇をして児童に見せたりした(写真１）。その後には，歯をみがく練習をし，歯みがきはとても楽しくて，大切なことなのだと指導している。



〔写真１　寸劇を行っている様子〕

小学部の児童生徒は，まだ自分で歯をきれいにみがけないため，保護者や担任に仕上げみがきのポイントを保健だよりとして配布し，仕上げみがきのお願いをしている。そのため，給食後の歯みがきでは，まず自分で歯をみがいた後，担任のところへ歯ブラシを持っていき，仕上げみがきをお願いする児童の姿がみられるようになっている。

(2) 中学部の実践

給食後の歯みがきを毎日続けているため，食べたら歯をみがくことは習慣になっている。しかし，歯のみがき方を観察しているとみがく場所が１箇所に限られていたり，みがく時間が短くなってしまったりするケースがみられた。そのため中学部では，すべての歯をまんべんなくみがき，みがき残しをなくすことを目標とした。

大きな歯の模型にスノースプレーをふりかけ，歯ブラシでこすり，汚れがとれることを練習できるような活動を行った（写真２）。その後，歯をみがく順番と時間を決めて歯みがきをすることを練習し，すべての歯をみがく練習をした。

〔写真２　歯垢を取り除く練習の様子〕

この歯みがき指導を行ったあとには，歯みがき週間を設け，歯みがきカレンダーを作ったり，洗面所に歯をみがく順番がかかれたポスターをはったりして，歯のみがき方について継続的に指導している。

(3) 高等部の実践

高等部では，ほとんどの生徒が自主的に歯をみがくことができる。「卒業し，社会へ出ると，自分の歯は自分で守る必要がある。」ということを伝え，自分の歯に合った歯のみがき方を習得することを目的とし，次のような染め出し指導を行っている。

午後の授業を利用して，染め出し指導を行う。染め出し液を綿棒にひたして，歯を染め出す（写真３）。給食後の歯みがきで，しっかり歯をみがいたつもりであるが，歯と歯の間や歯と歯肉の間にはみがき残しがたくさんあることを理解できるように自分の歯のどこの部分にみがき残しがあるのかを記録した。そして，どのようにみがけば，歯がきれいになるか指導している。

〔写真３　染め出し液で歯を染めている様子〕

染め出しをしたあとには，染め出された口の中と歯をみがいてきれいになった口の中の写真をとる。その写真を活用し，一人一人に合わせた保健だよりを作成・配布し，家庭でも，みがき残しなく，歯をみがくことができるように，保護者に協力をお願いしている。

４　まとめ

様々な障害があり，しかも小学部から高等部まで，年齢の幅がある児童生徒の在籍する特別支援学校は，歯科検診一つにおいても学部ごと，学年ごとで様々な工夫が必要である。

特別支援学校では，全身疾患の治療が歯科治療よりも優先されることが多い実情をふまえ，これからの課題として，口腔内の病気の予防を考えている。具体的には，むし歯や歯肉炎の予防として次の３点を重点に取り組む計画である。

- 食事の改善をして，甘い食べ物は，時間や食べ方などを工夫する。
- 歯みがきの習慣をつくり，口腔内を清潔に保つ。
- 定期健診，予防指導・処置を受ける。

歯科保健が日常の生活習慣として定着するよう，学校だけでなく家庭においても実践できるような指導の方法を考えていかなくてはならない。

今後も，児童生徒や保護者に歯の大切さを伝え，学校・家庭・医療機関が連携を図りながら口腔の機能改善・回復や口腔内の病気の予防に努めていきたい。

〈参考〉

学校歯科で使用する用語について

① むし歯……う歯は，音が「牛」と同じなので，できるだけさけ，「虫歯」は通常使用しない。

② 第一大臼歯……６歳頃に生えてくるので，「６歳臼歯」と呼ばれることが多く，特に，低学年の子どもへの説明に使用されている。しかし，生えてくる時期には個人差があるため，「第一大臼歯」という正しい名称で呼ぶことが望ましい。

③ 歯みがき……磨きは，強い力で研磨するように受け止められがちなので，平仮名にする。

④ むし歯菌……医学的には必ずしも正しくないが，子どもがイメージしやすいため，従来から慣用的に使用されている。

〈参考文献〉

・発達障害のある人の診療ハンドブック（医療のバリアフリー）：堀江まゆみ（白梅学園大学）：2008
・学校歯科保健参考資料「生きる力」をはぐくむ学校での歯・口の健康つくり：日本学校歯科医会：2005